（７）女子中学高等学校の運営総括

校　長　浅 里 愼 也

2020 年度年間聖句(学園聖句)

「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」

ローマの信徒への手紙 12 章 11 節～12 節

今年度の学校聖句は学園聖句と同じ聖書箇所としましたが、今年度の学校並びに学園状況を振り返る時、大いに励まされるものとなりました。創立者スミスが書き残した建学の精神にある“宗教的・霊的影響は、本校において最も重要なものです。”を実感する１年でした。

はじめに

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により教育活動が大きく制限制約を受け緊急対応に迫られる事態となりました。今年度は教育改革第Ⅰ期の完成年度であると同時に、2020 年度以降の教育改革第Ⅱ期の具体案の検討を“女子中高グランドデザイン 2030-2040”と関連付けながら進める計画でした。

しかし、入学礼拝・始業礼拝直後の２ヶ月以上に及ぶ学校閉鎖に始まった 2020 年度は、生徒の安心安全を最優先とする対応と生徒の学習機会を維持するために学校全体で新型コロナウイルス感染症防止対策を取りながらの学校運営を心がける１年となり、当初の計画を変更または大幅修正せざるを得ない事態を経験することになりました。

危急の外部要因ではありますが、緊急対応によりこれまでの教育活動を変更・延期・中止することで結果的に立ち止まり考えざるを得ない事態となったことは、女子中高の教育の原点を再考することが許された恵の時間でもありました。また、コロナ禍で生じた緊急課題への対応（変更、修正、再検討などの繰り返し）が、学校全体にこれまでにない、これから歩むべき方向への変化と影響を与えている様に感じています。

これらの動きを一時的な緊急対応に留めることなく、建学の精神(教育理念)として一世紀以上前に創立者スミスが示した“グローバル社会と英語教育”“多様性の尊重とリーダーシップ”を有する生徒の育成目標を、私たちが再度確認して建学の精神の具現化、教育改革に努めなければなりません。

この期間休校が長期化したため遠隔授業実施が急がれ、ICT 機器・Wi-Fi 環境整備が急務となりましたが、GIGA 構想の前倒し実施と学園主導により ICT 環境が整備されたことは本校にとって大きな助けとなりました。今年度整備された環境を有効に活用する教育内容の実践を急がなければなりません。

緊急対応が連続し、予想することが困難な状況の学校運営を継続できたのは、教職員の協力がなければできなかったことを実感する一年でした。

１.「建学の精神」に基づくキリスト教教育について

本校の学校生活と教育の土台であるキリスト教教育においてもコロナ禍による影響を避けることはできませんでした。しかし大きな制約を受ける中でこれまで長い間行ってきたキリスト教活動自体の存在意義、在り方を見つめ直す機会となりました。コロナ渦中での教職員の工夫と協力や生徒・保護者の理解により継続実施した講堂礼拝・学級礼拝。また内容と運営が工夫され実施されたクリスマス礼拝は新型コロナウイルス感染防止対策を行いながら内容を工夫し

実施することができました。しかし、中学「緑の教室」等の宿泊を伴う行事は従来の内容を変更して実施するか中止せざるを得ませんでした。今年度得た経験を今後に生かしていかなければなりません。

・学級礼拝、講堂礼拝の工夫と充実と内容の深化：コロナ禍での礼拝の在り方を検討し実施した。
・学年聖句を用いた６ヵ年間継続性のある礼拝と授業の継続：年間を通し計画的に実施した。
・地域教会との関係強化：コロナ禍のため実施できなかった。
・道徳の教科化についての研究の継続：実施できなかった。

２．学習指導及び生徒指導について

１）学習

年度方針にもある“本校の学習指導が受験指導のみに終始するのではなく、生涯を通して必要とされ生きる力となって育成される学習”の内容を具体的に教科教育と体験を取り入れた学びとして実施している「商品開発」「SDG s 教育」「GSlab(総合学習)」「スタディ・ツアー」等は、始業式直後から始まった休校や学校行事の中止延期により予定を大きく変更せざるを得ませんでした。他に進学相談会を動画配信型に変更、予定した進学フェスタ等のように企画自体を中止しなければならないものもありました。そういった中においても、生徒が学習のリズムを持続させることが難しい期間に卒業生による講演などを実施し、生徒に社会との繋がりや進路への関心を抱く機会を意識的に設けて、企画を工夫して実施できたものもありました。

・言語教育(英語・国語)の研究：取組めなかった。
・ケンブリッジ英検の推進と研究：2021 年以降も Cambridge English School 認定校。
・放課後学習、部活動と学習支援の在り方研究：放課後学習システムに関して業者を交えて検討したがコロナ禍のため中断した。
・リベラルアーツ教育の研究：取組めなかった。
・北星学園大学等との連携強化：Core コースでの連携授業を継続できたが、北星学園大への受験生増には結び付かなかった。
・国内英語研修（長期・短期・国内）の研究：これまでの留学(長期・短期)に代わる研修内容を検討し、一部実施できた。

次年度への検討課題

・定期試験日数の検討
・時間割作成の複雑化への対応。新カリキュラムでの改善の期待
・講習内容の点検と実施方法の改善

２）厚生

年度当初に計画していた YWCA による教会での奉仕、ZontaG クラブ、札幌ライラックまつり奉仕、老人施設訪問（神愛園手稲・ケア盤渓・他での賛美歌演奏・手作りクリスマスプレゼント）はハンドベルクワイアーによるクリスマス教会奉仕が１回のみで、他の活動は新型コロナウイルス感染症の影響により実施できませんでした。

３）クラブ指導

年間を通して例年のように継続した部活動ができない状況で、競技と学業の両立は生徒にとって容易なことではなく、例年以上に生徒の精神的なケアにも注意が必要でした。今年度もいじめ・体罰アンケートを実施し、例年同様注意を払い部活指導を行いました。また、厳しい環境の中ではありましたが全国大会に出場する部活動の活躍は生徒たちに元気を与えてくれました。

４）進路指導

休校期間中の生徒とのやりとりはスタディサプリを用いて行いましたが、通信環境の家庭間格差もあり、生徒教員双方が円滑に進めるためには開始から多少の時間が必要でした。ま

た、コロナ禍であったため、例年以上に進学先(大学・短期・専門学校等)が実施する入試方法の変更等の情報収集に注意を払わなければなりませんでした。

・学習合宿（Step1・High コース）の実施：学習合宿はすべて中止し、校内施設を利用した勉強会等を行った。
・補習・講習の充実：期間短縮やスタディサプリ等を用いた学習機会を設けた。
・ガイダンスの充実：コロナ禍により中止または簡略化した開催となった。
・大学新テスト対策研究：進路学習指導部を中心に行った。

５）生活指導

いじめ防止対応に関しては教職員間の情報共有を更に確実に行い、今後に備えて研修を行い研鑽を重ねなければなりません。

・学校生活マナー指導５項目（挨拶・言葉遣い・大声を出さない・飲食・正しい制服の着用）の実施：概ね達成できましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止対応策に指導の中心を置かなければなりませんでした。(三密回避とマスク着用・昼食指導と換気消毒等)
・保護者が期待する生活習慣の習得：取組めなかった。

３．教員の資質向上について

今年度、限られた予算の中で参加を予定していた研修会の多くが中止又は延期となり、教職員の多くは研修会に出席参加することができませんでした。しかし、年度後半新たに企画されたオンラインによる研修会が増加し利用することができました。また、今年整備された ICT 環境を用いて教員間の新たな形での情報共有・コミュニケーション方法を体験する機会を通して今後の可能性を実感できました。次年度以降もこれまでの研修会・セミナー形態以外での学びや研修する機会を十分に活用していきます。

・担任研修（学級運営・保護者対応）の実施：実施できなかった。
・初任者研修・中堅教員研修（キリスト教学校教育同盟・私立中高協会・他）への参加：コロナ禍のため、全ての研修会が中止された。
・校内外研修の実施と活用：回数は少ないがオンライン開催による研修会に出席できた。

４．生徒募集について

１）入試

昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響だけでなく、爆破予告で説明会の機会を失うなど校内で説明会を開催することが難しい状況でした。加えてチャレンジ・イングリッシュやミニ・オープンキャンパス等も中止せざるを得ませんでした。また、塾訪問・学校訪問なども例年のようには行うことが難しく、学校説明会参加生徒数と受験生徒数の予測が十分にできませんでした。

入試結果は中学入試 81 名(昨年度 83 名)、高校入試 186 名(昨年度 177 名)でした。今年度の入試分析を行い、新年度も新型コロナウイルス感染症の影響は継続することを考慮に入れた募集対策を検討実施していきます。

・学校塾訪問体制の継続と強化：コロナ禍のため塾訪問を中止した。
・中学受験（２科目・３科目・４科目）と英語試験導入の検証：一部行えた。
・受験生増加対策の研究と実践：検討は行ったが実践できなかった。
・専門英語科・音楽科の受験生動向の研究：検討のみ行った。
・入試広報活動で得た情報の共有：教員を一堂に集めて或いは SNS を用いて共有できた。

２）広報

コロナ禍ではありましたが、新しい入試広報部長と分掌部員教職員の創意工夫により SNS を活用した Zoom 等による個別相談やミニ・オープンキャンパス、チャレンジ・イングリッシュを新たに企画することができました。

・広報媒体の有効活用の研究：複数の SNS の活用、オンライン説明会を実施した。

・説明会・問題解説会に繋がる広報研究：SNS 活用の検討と実践を行った。
・オープンキャンパスの継続開催：コロナ禍のため中止した。

５．教育環境及び施設設備、財政について

１）ICT 環境

今年度学校運営の大部分は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、年度当初の予定計画を変更・延期・中止せざるを得ない中 ICT 環境は大きく改善されました。これは文科省の GIGA スクール構想の前倒し実施と学園の支援によるところが大きい結果です。年度末から校内で始まった教員のためのタブレットを用いた授業展開講習の成果にも次年度期待します。今後校内 Wi-Fi 環境の整備と中学生に一人一台配布されたタブレットを用いて ICT 教育を前進させます。

・サポート体制の構築：ICT 委員会が対応したが今後強化が必要。
・教員のデジタル指導書導入と活用：今年度は実施できなかったが、次年度講習を予定。
・キャリア教育・ICT 教材等の実践の継続と研究：十分取組めなかった。

２）財政目標、財政改善の取組み

財政収支は入学生徒数が微増にとどまる中、新型コロナウイルス感染防止対策に関わる予定外の支出が加わり財政改善の取組みを進めることができませんでした。次年度に 2030 年度を目標とする財政健全化計画を策定し実施していきます。

６．高大連携及び地域連携について

今年度も Core コースで北星学園大学・医療系大学との高大連携授業を実施することができました。北星学園大学との連携授業は昨年度の課題を改善し、当該学年である５年生への事前指導を行い実施しましたが今年度の学園内推薦生徒数に大きな変化は見られませんでした。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、町内会との活動を昨年度のように行うことはできませんでしたが、町内会とは協力協定を結び近年良好な関係が保たれています。次年度以降も校庭リンゴの一部共同育成、町内ゴミ拾い、町内行事・学校行事への相互参加などを継続して町内会との関係を大切にしていきます。

７．その他

１）学校運営のあり方

今年度は３科２コースの特徴ある教育展開を柱とする女子中高の教育改革第Ⅰ期の最終年度でした。コロナ禍の影響を大きく受けつつも行った第Ⅰ期総括を生かし、次年度以降当初の計画に、学校運営のスピードアップと新しい教育への対応を目的として、新しい分掌の立ち上げと運営体制並びに組織整備を行い、教育改革第Ⅰ期ですでに実施し始めている「SDGｓ教育」、「GSlab(総合学習)」に PBL 型学習を取り入れて改革第Ⅱ期に臨みます。

２）理事会との連携

今年度最大の出来事となった新型コロナウイルス感染症対策に、学園並びに理事会の理解と支援を頂いたことは、コロナ禍対応のための大きな助けとなりました。

３）学校改革

女子中高の教育改革第Ⅰ期 2020 プロジェクト終了年度は、多くの人が想定することのなかった新型コロナウイルス蔓延とその感染症対策に翻弄される中で教育改革実施と総括を行わなければならない１年となり、134 年に及ぶ女子中高の歴史の中で培われた自らの教育を見つめ直すと同時にその力量を問われる経験にもなりました。女子中高を取り囲む課題が内外に山積する状況は簡単に好転するものではありませんが、コロナ禍において、生徒たちのために持てる力を注ぎ続ける教職員の姿から創立者の教育理念を思い起こし、励ましを受ける１年でもありました。今年度の経験を活かし新しい時代に期待評価される学校づくりに励みたいと考えます。

・グローバル教育（Cambridge English・リベラル アーツ教育・国際基準の教育・IB 教育）：コロナ禍の緊急対応のため中長期的教育目標に関しては取組めなかった。
・言語教育としての英語教育・多言語教育：取組めなかった。
・単位制・通信制教育の研究：調査等はできたが検討はできなかった。
・イマージョン教育（インターナショナルスクールとの関係）：取組めなかった。
・総合学園としての幼児・初等・中等教育の研究と実践：取組めなかった。
・キリスト教学校としての平和教育：具体的に取組めなかった。

以　上